

国際共同研究事業スイスとの国際共同研究プログラム（JRPs） 事後評価結果

研究代表者所属機関・部局・職・氏名 北海道大学・遺伝子病制御研究所・教授・藤田 恭之

研究課題名：正常上皮細胞と変異細胞間に生じる細胞競合の統合的研究—新規癌予防薬開発を目指して

評 価 結 果	
	S 想定以上に意義があった
	A 意義があった
○	B ある程度意義があった
	C ほとんど意義がなかった
所 見	
<p>細胞競合はがんをはじめとする様々な研究領域で注目されており、その研究の進展が急務となっている。研究代表者は本分野の世界的リーダーの一人であり、これまでに独自性の高い研究成果を上げてきた。本研究は、その研究基盤を活用し、相手国との共同研究により相乗的な研究成果につなげることを目的として実施された。得られた研究成果は学術的にも価値の高いものであり、当該研究期間内に論文には至らなかったが、構築された共同研究体制は今後の更なる研究の発展に貢献するものと期待される。</p> <p>国際協働については、人的な交流を通じて、両国の研究者の知識や専門技術の相互移転がある程度は行われていたと判断できるが、その人数や頻度などが十分であったとは言えない。また、相手国との交流により将来の本分野を支える若手研究者の養成に努めたことは評価できるが、若手による研究成果の発表実績がないのは残念である。</p> <p>日本側の成果に比して、スイス側の貢献度及び共同研究の意義を認めることが難しい。最終年度に国際シンポジウムを開催したことは評価したいが、今後も継続することが望まれる。</p> <p>本研究の成果は、がん発生初期において上皮細胞が多層化するメカニズムの一端を明らかにできたことである。この成果はがんの予防薬の開発に向けたシーズ開発につながる可能性があり、研究代表者のグループの計画は円滑に実行できたと推測できる。しかしながら、共同研究の貢献は今後の成果に期待したい。事業終了後も遺伝子改変マウスを介した研究交流活動が期待されるが、今後お互いが明らかにしてきた知見を基に共同研究の成果として、共著論文の発表を期待する。</p>	